

本編に行く前に、少しだけ、僕の駄弁に付き合ってほしい。

僕は、生まれてからずっと『恋愛』というものを知らなかつた。

：いや、正確に言うなれば、それが存在することは承知していたけど、僕自身には無縁な話だと思っていた。

「○○は××の事が好きみたい」

とか。

「○○が□□に告白した」

とか。

（『恋愛』なんて、一人でいるのが好きな僕には関係のない話）

小学校高学年の頃、同じクラスの女子にいじめられたり、中学校で個人的に苦手だった男子に友達をほぼ全員奪われたり（この事柄に関しては、僕の思い込みが強いのかも知れないが）、色々と人間関係で悩まされた僕は、こういうものなのだろうと思い込んでいた。

だが、実際は違つた…というのが、今から書こうとしている話の核にあたる部分だ。

お決まりの展開だというのは、十分承知している。

僕は、物書きとしてはまだまだ拙い人間だ。というのも、母国語すらまともに扱えていないし、段落や改行のタイミングもよく把握していない。それだけでなく、王道の展開しか頭に浮かばなかつたりする。

そのくせに、今はパソコンで文字を打つことに専念しているのだ。おこがましいと言つてしまえば、それまでのことであろう。

『そのくせに』や『おこがましい』なんて表現を用いたが、別に物語を作ることが嫌いなのではない。むしろ、何かを生み出すことは好きで、昔からやつっていた。

ただ、今まで自己満足の範囲でやつっていたからだろう。現在の内心を正直に言つてしまふと、他人に見せるに値しないものを僕は執筆しているのではないかと感じるのだ。

そこで、一つお願いがある。

僕の作品を読んでいる最中、「非常につまらない」や「読み応えがない」など、色々こみ上げてくるものがあると思う。だが、そこで読むのを止めずに、すべてに目を通した後、感想を口に出してくれないだろうか。高評価でなくとも、批判や酷評でいい。

僕の紡ぐ文章が、どれほどの人に受け入れてもらえるかを知りたいのだ。

では、くだらない前置きはこのくらいにして、そろそろ本題に移ろう。

：今までの僕の人生で、唯一となる、恋のお話を。

時は、二年前：高校生時代まで遡る。

前置きでも触れたことなのだが、当時の僕は、過去のいざこざから他人と接することを極端に避けている。誰かが僕目当てで近づいてくると、気づいていないふりをしてトイレに向かったり、話しかけてきても、読書に集中しているふりをして無視したりと…思い返してみると、『クラスに馴染もうとしない、相当いかれた人間』として同級生に思われていたのかもしれない。成績が下の方であつたにも関わらず、推薦で学級代表という一番面倒くさそうな委員に強制的に決められたのも、この行動がもたらした結果だと、今になつて感じる。…そのお陰で、最終的には担任の先生に一番信頼される存在となるのだが、この場でそれを事細かく述べるのは省略させていただく。

他人と関わることに消極的な僕であつたが、口を開くことを厭わなかつた同級生（俗に言う『友達』というものである）は、少なからず存在する。

「うつすうつす、今日も元気に創作生活してる〜？」

机の上で睡魔と戦う僕を、深海のような目で見つめる彼女こそ、数少ない友達の一人。

僕と同クラスの、
西百合 乃愛にしゆり のあである。

彼女と出会つたのは入学式に向かうために乗車していたバスの中。僕は一人席で呆然と景色を眺めていただけだが、学校最寄りから二つ前のバス停で、食パンを咥えながら全速力で乗り込んできた少女がいた。それが彼女だ。一瞬、自分は漫画の世界に迷い込んだのではないかと心の片隅で不安を感じたが、恐らく、自分と同じ学校の制服を見たからだろう。類をリストのように膨らませた彼女が、僕の前のつり革を左手でさつと握り、右手で僕のことを指さしながら、

「あつ、もしゆかしふえおにやじ高校の人！？」（あ、もしかして同じ高校の人！？）

と、日本語と宇宙語が混合したような言葉を発したのだ。僕は思わず吹き出して笑つた。

恐らく、この時に『目の前の女性は過去に僕を傷つけた人間と違う』という認識が無意識のうちに形成されたのだろう。でないと、ここで何もなかつたら、普段から雨傘を持ち歩き、独特な口調の子と絡もうなんて思わないだろう。

そんな昔のことを思い出しながら、僕は彼女に「してないね。大体、前期末テストまで2週間切つたのに、妄想に浸る暇なんてないよ」と、冷静に返事した。

「そうだよね。流石、学級代表！よーし、そんな『ノ助君』のやる気を吸収してやる…！」

「いやいや、それほどでも…って、他人のやる気を吸収してどうする！？」

「よしつ！ノ助君のノリツッコミ、ゲット！ノアちゃんはそれが聞きたかったのだよ！」

「何それ。そんなことする前に、西百合さんは数学の公式のひとつやふたつ、覚えた方がいい気がするけど…？」

「こら、笑顔でノアちゃんの痛いところ突つくんじゃないよ！」

軽いげんこつを数発、西百合さんは僕の頭に入れた後、

「いいもん、ノアはお家庭教師の冬夜先生に数学のこと聞くもん！」

と、少しだけ涙目になりながら、放課後の校舎を後にした。

「じゃあ、僕も家に帰るか」

誰もいない教室に、僕一人だけというのは少し心細かったという理由もあって、さつと荷物を片付け、赤に染まる空の中を僕は急ぎ足で駆け抜けた。

「ここで、二つほど補足しておこう。

一つ目は、西百合さんの「創作生活」発言について。

彼女の言動はどれもこれも謎ばかりだと思うが、これだけは説明が必要だと思った。

ぶつちやけた話、僕は中学生の頃から、頭の中に住人を飼っている。その住人達のやり取りを、携帯のメモ帳や小さなノートに記録することが、当時の僕の小さな楽しみであつたのだが、この事が、彼女のいう「創作生活」の一つにあたつた。一次創作というやつである。彼女はある時、

「頭の住人達の会話を、ちゃんと記録しているのか」と問いかけていたのだ。

記録する暇はなかつた。会話は延々と僕の脳内で行われていたが。

そして二つ目、「ノ助」について。

僕が高校生の時、「ノ助」というあだ名を同じクラスの奴らにつけられていた。何故そんなおかしな名前で呼ばれるようになつたかというと、古典の授業で、先生に黒板の日本語を漢文で書きなさいという任務が与えられ、仕方なしに、チョークで解答を記した時のこと。文法的な間違いはなかつたのだが、「我」の六画目…「ノ」の形に似た、はらいの部分を何故か忘れた状態で席に戻つてしまつたのだ。先生はこの間違いを指摘しなかつたが、それ以来、クラスの皆から「ノ抜け助」と呼ばれ、何度も形を変えながら、最終的に「ノ助」に落ち着いたのである。

当時の僕にとって、「ノ助」は負のレッテルであった。今では何てことない思い出の一枚片なのだけど。

――このやり取りから、二ヶ月後の事だったか。

ふとしたことがきっかけで、一次創作に没頭し、人との関わりを避けていた僕が、心の底で嫌っていた〈恋〉と向かい合うことになるのは。

光陰矢のごとし、とはよく言うけれど、夏休みはあつという間に終わりを告げるものだ。

特に友達と遊ぶこともなく、かといって、勉学に打ち込むこともなく、だらだらと自室に

引きこもる至福の日々を思い出しては、憂鬱感に沈む、そんな夏休み明けのこと。

周囲では「文化祭の劇の台本まだかな」とか「体育祭のリレーで必勝するための面子を揃える」とか、この学校の生徒のほとんどが待望している文化祭と体育祭で花を咲かせるため一生懸命働いているが、僕にはやはり関係のない話。いつものようにノートとにらめっこをしていた。本当の現実を謳歌する者に荷担するより、僕の脳内の現状を再現する方が価値のあることだ。

「ちよいちよい、ノ助君。話いいかい？」

「嫌でも、荷担しなくてはならないときは、必ずある。

「なに、西百合さん。僕は今こう見えて忙しいんだけど」

「平凡学生の創作生活に忙しいもへつたくれもありませーん。薄い本作るなら話は別だけどね！」

「形にするための作業なら良いんだ」

「ノアは今、ノ助君家の泡隈さんにお熱なのだよ。どこからともなく現れでは、主人公を物語の核心に向かわせる、あの謎めいた浮浪者感がとてもなく好きすぎる。だから、できれば泡隈さんメインが嬉しいかな…って、そんなことは置いといて！」

赤い顔で発言を止めた彼女に対して、僕は遺憾の意と安堵の気持ちを抱いた。遺憾だと思ったのは、僕の頭の中の住人に対する熱烈な想いを聞きたかったから。安堵したのは、二人とも大火傷していたかもしれないからだ。僕は創作していることを知られたことによつて、彼女は自らの好み（二次元の）を知られたことによつて。幸い、このやり取りは誰の耳にも入つていなかつたが、それを察知して、彼女は話を戻したのだと思う。

西百合さんの『話』というのは、実に単純で、担任の職員室に来て皆にあるものを配つておいてほしいという伝言だつた。

担任の頼みならば仕方がない。僕は渋々ノートをしまつて、急いで職員室に向かつた。

職員室について数分後。担任の「よろしくね」の一言と共に、僕は段ボール箱を受け取つた。中に入つてたのは、表紙に『白雪姫』と記され、ホツチキスで綴じられた紙の束。そう。『あるもの』とは、文化祭で行う劇の台本であつた。自らの生徒のために、仕事の合間を縫つて作つたのだろう。

「どうせなら、僕じゃなくて文化祭委員の人間に頼めば良いのに」

つまらない愚痴を吐きながら、慎重かつ迅速に運ぶ。台本を落としたら、折角の先生の苦労に泥を塗ることになるような気がする。かといって、亀のような速さで動くとクラスの皆に迷惑がかかる。一応、〈学級代表〉という肩書きを持つ者だ。自分の顔だけではなく、数の少ない友達にも顔に泥を塗ることになるかもしれない。だから、慎重かつ迅速に、なのだ。

教室に戻つてきたのは、荷物を受け取つて数分後のことだつた。教卓に段ボールを置いた

瞬間に、皆から「台本か?」「台本なのか?」と質問攻めにあった。僕はただ淡々と「そうだよ。一人一冊持つて行け、だつてさ」とだけ伝えて、自分の席に戻った。前にいる奴らは狂つたかのように舞つていた。

(たかが台本だけで、人つてこんなに馬鹿になれるものなのかな)
と思いながら、机の中からノートを取り出そうとした。

ちょうど、その時だつたと思う。

僕の背後から、「ねえ」と呼ぶ声がした。

いつもの僕なら無視を決めたのだろうが、何故かその時はきちんと反応して、後ろを振り向いた。

そこにいたのは、同じクラスの京本鈴花。きょうもとすずか。僕と同じで、教室では一人でいることが多い女子で、この劇の脚本を手がけた者の一人だ。

彼女は僕に向かつてこう言つた。

「台本、届けてくれてありがとう」

少しの笑みを含ませ、彼女はすぐに立ち去つた。僕にちょっとしたお礼を言いに来ただけなのだ。

彼女にとつては、それだけだつたのだが。

僕の心の中にある、変なスイッチが押された気がした。

その日から、僕はおかしくなつた。

来る日も来る日も頭に浮かぶのは、妄想ではなく、彼女のあの笑顔。常にクラス内の状況を観察する筈が、漫然としていることもしばしば。愛しの我が家に帰還しても、携帯のメモ帳やノートを見るところなく、ましてや、三年弱の間ずっと口を開いていた、頭の中の住人が会話しないときもある。ちよつとした緊急事態であるが、その危機に鈍感な頭は気づかない。この事に気づいたのは：いや、気づかされたのは、異常発生から一週間が経過した日の放課後。僕が教室で一人残つて自習をしているときに、恐らく、再テストを受け終わつて帰るついでだつたのだろう、西百合さんがそつと教室のドアを開けるところから始まつた。

「おや、誰かと思えば…最近ノアに創作の結晶を見せてこないノ助君ではないか。丁度良い。今すぐ手持ちの創作の結晶を見せなさい。それで今までのツケを帳消しにしてやろう」

西百合さんは僕が創作の結晶…つまり、頭の住人の会話や動作を書き留めたノートやメモ帳を見せてこないことに、少し怒つていた。いや、実際は怒つてないようみえたが、恐らく怒つていたのだろう。彼女は僕の作品が好きだったから。その小さな怒りを感じたときに、僕は気づいた。

「ツケなんてためたことないけど。というか、創作の結晶つて…あのノートのこと?最近メ

モしてないから見せなくても良いかなあ、つて…あれ？」

あれほど大切にしていた妄想が、僕の日常から姿を消していくことに。

この事に一番驚いたのは、意外にも僕自身ではなく、彼女だった。

「なぬっ！？ メモしてない…！？あの『常々妄想青年』のノ助君が…妄想を…していない…ですとつ…？」

「そのあだ名、僕のこと馬鹿にしてる感が凄く溢れ出てるんだけど」

「まあ、それはそれ、これはこれ」

「ほつとくのかい、本人は不服なんだけど」

僕の言葉や感情はスルーして、青き瞳の彼女はその純粹な視線を僕の方に向ける。何時ものことと言えば何時ものことだが、この時の視線は何時もより熱を帯びていた。

「ノ助君…はつきり申し上げよう。『常々妄想青年』の称号を手に入れた君が、妄想してないなんて、君にとつては由々しき事態ではないか！ノアにとつても由々しき事態！素敵キヤラの活躍の続きを拝見できないのだから！」

「不服って言つてゐるのに、使い続けるのかい。あと、最後のは完全に西百合さんの都合…」「とにかく、どうしてノ助君が一次創作から離れてしまつたのか、ノアは一刻も早く知りたい。今日の晩ご飯ほっぽり出すことになつても」

「今日の晩ご飯、一体何なの？」

「おかん特製の野菜炒め。そして、炊き込みご飯。ノアの苦手なおかずシリーズである。そんなことは良いから。さ、ノアに何があつたのか、教えたまえよ」

…いくら苦手でも、『僕のこと×夕飯の野菜炒め&炊き込みご飯』という不等式は、親御さんに失礼すぎる。「今すぐその発言を撤回して」と言いたくなつたが、そこはぐつと堪えて、僕は自分の不具合の原因を探つた。

思い当たる節は、ひとつだけあつた。

「そういや…ここ一週間、ずっと京本さんのこと眺めていた気がする」

「ふあ…？」

変な声が聞こえたが、僕は無視して発言を続ける。

「あくまで『そんな気がする』って話ね。あと、目を閉じたときに出でてくるのが、住人じやなくて彼女の笑顔だつたり」

「ふあ…？」

「…何その反応。僕の不具合に対する処方箋は見つかったの、西百合先生？」

西百合さんが二回連續で同じ奇声を発するのは、なかなか珍しい事だつた（僕調べ）。だから、無視を止めて、面白おかしく彼女の見解を聞いてみることにした。勿論、当てにはしないが、一応参考程度までに留める予定だつた。

…彼女は、あつけにとられた顔のまま、予想もしなかつたことを口にした。
「ノ助君、ノ助君。それさ、京本さんに〈ひとめぼれ〉してない？」

「…え？」

僕の思考は一瞬フリーズした。〈ひとめぼれ〉とは、一体何だ。いや、言葉は既に知っている。知っているはず。でも、あの言葉の状態ではないだろう、とか。無駄な抵抗を何度も試みたが、何も知らない医者は、さらなる攻撃を加えた。

「だから、一目惚れ！ 京本さんにフォーリンラブしてること！」

「…嘘！？」

僕は思わず、大声をあげた。冒頭でも述べたが、僕は心の何処かで（恋とは無縁な人生を暮らすのだ）と思っていた。し、それに対しても否定はしなかった。現に、人間関係のギクシヤクを目の当たりにしてから、この時までずっと、恋に落ちた事はなかった。だから、『僕に恋は関係ない』という命題は真だと信じて疑わなかつた。この数年間信じ続けた事が、嘘だと発覚したら、誰しも反応したくなる。少なくとも、僕はそうだ。

「ば、ばばば、馬鹿言うなよ！？ 流石に冗談キツいって、西百合さん」

「冗談なんかじやないよ。この名医ノアが言うんだから、間違いない。ノ助君：君は、京本さんに恋をした！」

「い、いやいやいや…大体僕、恋なんてしない人間だから。そんな現実を謳歌する人間が陥る泥沼になんて落ちないって決めているから」

「ノ助君：残念ながらこの事実はひっくり返らないのだよ。あと、君の恋についての認識は、今はもう生き昼ドラによって植え付けられたのかなって思っちゃうから、一旦落ち着こう。うん」

「落ち着けって言われても、そんな急には」

「わかった。なら、君に気持ちの整理期間あげよう。ある程度落ち着いた段階で、ノアに一声頂戴な。それから話の続きをしよう」

「りよ、了解」

西百合さんの提案により、僕の不具合探しは、途中休憩をはさむことになつた。

「なんでだろう」

自宅に帰り、夕飯を頂いてから、即刻自室のベッドになだれ込む。

「そもそも、そもそもだ。『ありがとう』って声かけられただけで恋に落ちるつて、どれだけ軽い男なんだ、僕は。…いやいやいや、まだ決まつた訳じやないのに、何で確定事項として処理してんのだよ」

独り言がボロボロと零れる。別に悪いことだと個人的には思わないが、その日は比較的多く呟いた気がする。

「西百合さんに指摘されて気づくとか、ラブコメだつたら泥沼の三角関係が始まる奴だよ。彼女は宇宙人みたいだから、僕に好意なんて寄せてるはずないんだけど…。逆に、僕のこと好きだつたら、わざわざ自分に不利になるような事は伝えないだろうし。…今考えるべき事か、これ。本筋から脱線しまくつて。自分の事だけを考えないと」

「兄さん、うるさい！勉強に集中できないじやん！」
「ごめん！」

周りを考えずに呟いた結果、隣の部屋にいる、普段は怒らない弟が吠えた。僕は瞬発的に謝つて、ペンを握らずにひたすら頭を動かした。

本業を忘れ、自分の行いを一から振り返ること二日。どの方向から見ても、僕が一目惚れしたと考える方が色々と辻褄が合うことが発覚した。また、嫌々でも認めてみると、それまでは心がスッとしたのだ。初めて京本さんの事ばかり頭に浮かんだ、その日から積もりに積もった、靄がかかったような心が。

この事を、放課後の西百合さんに伝えてみた。

「おお、ようやつと受け入れたか：荒ぶるノ助君。じゃ、話を再開しようか」

「その『荒ぶる神よ、鎮まりたまえ！』みたいな言い方やめて。嫌々だけど、受け入れるだけ受け入れたから」

「よしよし、ノ助君は賢い！」

何故か僕の頭を撫でながら、彼女は口を開いた。

「あくまでもノアの考えなんだけど…恋の悩みっていうのは、ほつとも治らない。どうにかしないと、少なくとも、私達が高校卒業するまで、ずっとこのままの生活が続く。ノ助君的にはどうだい？このままの生活で満足なのかい？」

「一年半もこの状態が続いたら、流石に嫌だ」

「でしょでしょ？ノアも嫌だよ。ノ助君の創作が読めなくなるから！」

「あの…最後だけキラキラした目で言うの止めて」

僕がかなり狼狽えているというのに、相変わらずの調子だ。常人なら、ひっくり返つて動けなくなりそุดが、僕は彼女のペースについてくることが出来た。

「君が抱える心の病に効く処方箋。この西百合名医が与えよう…すばり、今の率直な気持ちを京本さんに伝えることだ！結果はどうでもいい。振られようが受理されようが関係ない。とにかく、気持ちを伝えたら、それでいいのだ！」

「…待て待て待て。それって、いきなり告白しろって事！？色々課程吹っ飛んでない！？」
ペースにはついて来ることが出来た。時々来るボディーブローは、流石に避けきれないのだが。

「うむむ、そんなに振られるのが嫌いなのかい…なら、徐々に徐々に距離を縮めていくて、最終手段に告白を残しとく？」

「普通はそうするでしょ。どうせ振られるつて分かってるけどさ。少なくとも、頭の住人達はそうしてた」

「どうせ振られるとか言わないの！ラッキー・バンチでOKもらえるつて事もあるんだから…てか、確かにそうだね！ノ助君の『フリーさんとミオ先生の駆け落ち話』だったら、フリーさ

んが十何年も時間かけて、ミオ先生の心と胃袋をがっちり掴んだもんね！じやあ、じりじりと攻めていくタイプでいこう！」

「わかったわかった。じやあ、それで頑張ってみるよ、西百合先生」

「ういっす！頑張るのだよ！〈妄想青年〉！」

「…常々妄想青年じやなかつたつけ？どつちにしても、馬鹿にしてる感は同じだけど。」

「細かいことは気にするでないよ！」

僕の駄文の内容をほじくり返されたら、それを否定する気がなくなる。僕は渋々了解し、西百合さんのアドバイスを実行ようと高をくくつた。

こうして、当時の僕が思う〈現実〉へ帰還するための戦い：わかりやすく言うと、僕の好意を伝えるために奮闘する日々の幕が上がつたのだ。

次の日の朝、僕は何時もより早く登校した。

僕がやらなければいけないことは、まず、彼女に声をかけることだと思った。あいさつは軽いものだが、それを重ねていけば、ラッキー・パンチの出現率が上がる気がしたからだ。

（落ち着け、落ち着け）とひたすら心で唱えること数分。ターゲットの彼女が教室に現れた。

「お、おはよ！」

勇気を振り縛つて声をかけた。声をかけたつもりだったのだが、彼女がしていたイヤホンという音の壁は、僕のなよなよとしたあいさつを見事にシャットダウンしたのだ。

少しダルそうに耳に手をかけ、「何？」と訴えかけるような鋭い目。僕はそれを確認してすぐに、あいさつするタイミングを間違ったことに気づかせるのに十分だった。僕はただ「な、なんでもない」と言つて、自分の席に帰還した。担任が朝の連絡事項を伝えに来るまでの間、足が悲鳴を上げていた。

昼休み。僕は颯爽と弁当を腹に詰めてから、次限に行われる英語の予習をしていた。予習とはいっても、分からぬ単語を調べるだけの作業である。朝に失敗した僕が、次に出来ることは、和英辞典（電子辞書でも可）を彼女から少しの間だけ借りることであると判断した。勿論、僕は今日電子辞書を持つていて。しかし、今はどうしても彼女に声をかけたい現状。後でいくらでも言い訳できるから、とりあえず、天から振ってきたこの案を実行に移そうと決意した。

（次こそは、次こそは）と念じながら、意を決して彼女の席に向かった。心なしか、足が少し震えていた気がする。しかし、そんなことは気にしていられなかつた。何時まで経つても彼女との距離は埋まらないからだ。

「あ、あのっ」

僕は再び声をかけた。なよなよとした声である。今度の彼女は音の壁を張つていなかつたので、すぐに「どうしたの？」反応が返ってきた。朝ほどではないが、彼女の目つきに一瞬武者震いをしたが、そのことには何も触れず、本題に突撃した。

「お、俺さ…電子辞書忘れて来てさ。良かつたら、京本さんの奴を貸してくれないかなって思つて。紙のでも良いからさ」

たかが一行少しの文だが、今までよりハツキリ言えたことで、内心僕は舞い上がつていた。内心。しかし、喜んで数秒後。彼女は眉をしかめた。

「今、丁度調べ事してんのだよね…それで、私、紙の辞書なんて学校にいちいち持つてきてないし。悪いけど、他の人から借りてくれないかな」

僕はただ「あっ、ごめん」と弱々しい謝罪をして、一目散に席に着くことしかできなかつた。あの顔は、紛れもなく、「見て分からぬかな、このKY」と言いたげな顔であつた。被害妄想かもしれないが、あの場面に遭遇した僕はそう思った。ただ単に声をかける事だけを考えていた愚か者に、標的者の周りの状況を確認するという基本的動作は頭から完璧に抜けていた。その事を必死に攻め続けていると、その日の学業を全うする時間は終わつ

ていた。

そんな、なげなしの勇気がことごとく負の結果をもたらす日々が二週間近く続いた。どうにか自分で現状を打破しようと、もがけばもがくほど悪化していく現状に、段々弱気になつていく。そんな僕を前にして、放課後の西百合さんは溜息をついていた。手持ちの雨傘を教室で振り回しながら。

「全く、最近の君は見るに堪えないよ、ノ助君。京本さん見るだけで、ビビっておどおどするなんて……百獣の王であるライオンに命を狙われたシマウマにでもなったのか！」

「シ、シマウマ……」

「言つておくけども、ノ助君がシマウマ化したのは自業自得だつたりするからね？今まで他人と密に接しようとしたのに、無理に距離を縮めようとしたのが悪い。ノ助君みたいな、あまり人と積極的に関わろうとしない人間は、策を練つて練つてから動くべきだったんだよ。そうノアは思う」

「うぐう……」

僕は、何も言い返せなかつた。シマウマの例えも絶妙だし、距離が一方的に開いていく原因も、的を射ていてる。傘で床を突く音と共に、容赦ない言葉が心に突き刺さる。ただ下を向くことしか出来ない僕に、彼女はまた溜息をついた。

「まあ、自分を責め続けるのも良くないよ、ノ助君。ノ助君はノ助君なりに頑張つた。結果は散々だけど、その努力は無駄なものじやないさ！」

「に、西百合さん……」

「それに、悪いのはノ助君だけじやない。一刻も早く君の状況を察知して、少女漫画の王道パターン教えたり、誰かから恋愛のアドバイスをもらつて伝えたりしなかつたノアも悪い。君の友人かつ『妄想青年の人生最初の恋を応援し隊』隊長としては、あるまじき行動だわ：ごめんちやい」

「い、いやいや、西百合さんが謝ることじやないよ」

眼前で頭を何度も下げる彼女が、僕には不思議に見えた。いや、彼女の行動は何時も不思議なものばかりだけど、こんなダメな僕のために、ここまで声をかけてくれる理由が見いだせないからだ。いや、見いだせはする。きっと「僕の創作を見たいから」だ。でも、あんな駄作のために真剣に向き合つてくれる事が、本当に不思議で仕方なかつたのだ。

「ごめんちやい」「大丈夫、大丈夫」のやり取りが十回ほど行われ、（もう、本当に大丈夫なんだけどな）という思いが、ふつふつと湧いてきた。それとほぼ同時に、西百合さんは何か名案が閃いたような顔をした。

「……まだ、諦めるのは早いのではないか？ノ助君や」

「え？まだ何か出来るつていうの？」

「そうよ…よく思い出せ。汝は本来の目的を忘れてる。『京本さんに好きの気持ちを伝えて、妄想青年モードにチエニジする』という目的を。それを見失つて、なるべく良い返事が来るよう努力した結果、爆散した。見事なまでに！ドカンと！爆ぜた！精神がめざましき程にこぼれおつるのも無理はなし！」

傘を杖に見立て奇妙な動きをする西百合さんに、一瞬僕はついていけなかつたが、古典の苦手な彼女が、古語を乱用されているという違和感が、その動きの原因と、すぐ結びついた。「なんで泡隈みたいな話しがなつてるの。そして、何気に刺さつてるからね、最後の言葉」口元を緩め、ウフフと笑いながら彼女は言う。

「我は悟つたのよ。なずむ汝が真に進む道を…つて、泡隈さんなら言う気がした。うん。ほら、泡隈さんつてさ、主人公にアドバイスする役割のキャラだから、ぴつたりかなつて思つて。後、さつき古典単語の再テスト受けてきたから」

「…絶対後者の方が比率高いよね」

「そんなことはどうでもいい！」

「どうでもいいんだ」

「どうでもいいから話を戻す！ノアが君に教える最終手段…それはだね…」

大きく息を吸い込む彼女から放たれる言葉は、一体どのようなものなのか。この時の僕は予想もつかなかつたが、きっと無茶ぶりのような提案をされるのではないかと無意識の奥で思つていた。

「今までの事はすっかり忘れて、告白せよ！それが今の君の出来る最後の手段だ！！」

「だ、だよね…」

お決まりの展開となりつつあるが、鳩尾を殴られたような感覚に襲われた。流石、人間の皮を被つた宇宙人。既に瀕死状態である僕に向かって、「死んでこい！」と平気な顔をして言つてのけた。そんな僕の内心を読み取つたかのように、彼女は言葉を続ける。

「別に、振られてこいつて言つてるわけじゃないよ？伝えるのが目的なんだから、一回直接伝えてみたら良いじやんつて思つただけ」

「でも、確実に振られるフラグだよね。精神が死ぬよ？オーバーキル状態に陥るよ？」
「その時は、思う存分慰めてやろう。サーティーン・アイスでも、ミセスドーナツツでも、何でも好きなものをおごつてやるぞい」

目の前でどや顔を決める宇宙人。何故僕は彼女と仲良くなつたのだろうかという疑問が、頭の中で膨らんだが、それと同時に、もう残された手段はこれぐらいしかないのだろう。そう思うと、自然と吹つ切れていた。

「…その言葉に二言はない？」

「勿論！」

「なら、やってみるだけやってみる。どうせ振られるけどさ」

「よしきた！頑張るのだぞ、ノ助君や！」

満面の笑みを浮かべる彼女とは正反対に、僕は漫然としていた。普段の僕であれば、負け戦だと決まっている試合は放棄してしまう人間性であるが故に、絶対断るのだが、甘味と頭の住人を引き替えであるのなら、全力を尽くしてやるしかないと、何処かで悟ったのだ。妄想と創作という大きな趣味を失った人間は、頭のねじが普段より数本抜けた状態になつた。

こうして、世の中の誰よりも醜い存在となつた僕は、最後の悪あがきを開始した。

告白すると宣言して一週間後の夕方。何とかして教室に呼び止める事に成功した僕は、赤く光る空を見つめながら、小さく「思い通りに描いた未来には必ずしもならない。挫折を知つてこそ、初めて得られるものがある」と呟いた。どちらも、頭の中の住人がかつて僕に言つた台詞だ。懐かしい。一刻も早くこの呪縛から解き放たれて、彼らに会いたい。幻想の產物に恋しくなつた気持ちを抑え、僕は意を決して教室に突撃した。

「どうしたの、委員長。私に言いたい事つて」

鋭い視線、歪んだ眉間のしわ。その表情から伝わつてくる負の予言。僕は心の何処かで怯えながらも、必死に口を動かした。

「単刀直入に言うよ。僕、君のことが好きなんだ！」

深々と頭を下げ、僕は思いの丈を彼女に伝えた。頭を下げたのは、顔を見ていられなくなつたからだ。

（取りあえず、やるだけのことはやつたぞ）

…そうホツとするのも束の間。舌打ちの音が教室内に響いた。何事かと思つて正面を向くと、とても不機嫌そうな顔をした京本さんが其処にいた。

「だから、何？前々から思つてたんだけど、ほんとに気持ち悪いよね。見ててウザい」「え…？」

今まで僕の目で捕らえてきた彼女からは想像もつかない、暴言の類いが耳に入る。

「だから、ウザいって。何かと言つて私に近づいてきてさ…不愉快だつて、その態度。たかが『ありがとう』って言われただけで惚れる男と付き合うなんて、絶対ゴメンだから」

「そ、そうだよね…ごめん」

僕はただ、謝ることしかできなかつた。返す言葉も見当たらぬ、そんな僕に追い打ちをかけるように、背後に突然の衝撃と痛みを感じた。思わず地面に伏す僕を、教室に隠れていたと思われる他クラスの女子数人があざ笑つた。

「鈴花、こいつ？前々からストーカーみたいになつてる男つてのは？」

「うん」

「ぼつこぼこにして良いよね？こんなブス眼鏡、生きてる価値ないし」

「お好きにどうぞ」

話を脱線させるが、京本さんは昨年、この学校で悪い噂しか聞かない女子グループのリーダー的存在だつたらしい。僕はストーカー行為などしていないので（彼女に尾行したことはない、本当の話だ）、僕を懲らしめたいが為に、元々の友達に嘘を吹き込んだのだろう。

経緯はどうであれ、この時何も知らなかつた僕は、事実無根の叫びが通じることなく、無慈悲な暴力を浴びた。次第に遠のく背中を、無理をしてでも追いかけたがつたが、それは叶わなかつた。

僕の初恋は、こうして、見るも無惨な形になつて終わりを告げた。

：で、この後どうなったのかというと、僕は身体にも心にも傷を負った。体の至るところに暴力の痕が残ったし、女子にボコボコにされた事が、過去のいじめと重なつたつてのもあるんだけど、クラスでの事実無根な噂が広まって：告白してから数日間は、妄想どころの話じやなかつた。担任や家族から「いじめられていいか」と心配されたけれど、真実を告げたら、それこそ本当のいじめに発展しかねないと知つてゐるから、言える訳がない。噂が原因で冷遇を受ける事もしばしばあつた。生きてることが嫌になつたりさえもした。

でも、そんな僕を西百合さんは見捨てなかつた。宣言通り、サーティーン・アイスもミセスドーナツもおこつてくれたし、何よりも、噂が大きく広まるのを防いでくれた。どうやつて阻止したのかは、未だ分からぬけど、「ノ助君の平穏な生活を蝕むお邪魔虫、このノアが成敗してくれる！」と言つてから数日後に事態が収束したから、きっと彼女のおかげだ。彼女のお陰で、元の現実に帰つてくることが出来た。

それだけではない。この一件が引き金で、僕は〈本当の現実〉に目を背けるのを止めた。勿論、妄想はするが、現実に目を向けていないと、未来の自分が色々後悔すると、あの時、実感したからだ。

その手始めに、現在大学生の僕は、帰宅部を卒業して、とある文化部に入った。対人関係についての問題は、多くの人とふれあえる場で解決しようと思つたからだ。

まあ、何がともあれ。

『僕の初恋は、僕を本当の現実へ帰還させるきつかけとなつた』

ただそれだけを、誰かに聞いてもらつたかった。顔も名前も知らない誰かに。

ただその目的の為だけに書かれた、醜い自己満足の物語は、ここで終わりを迎える。

——これは、とある過去を懐古する青年の話。